

¡Hola amigos!

RとNの Málaga からの手紙

(010号)

皆さんこんにちは。

このページは、私達のスペインでの日々の暮らしを友人・知人の皆さんに知って頂こうと思って開きました。 ですからごく私的なもので、読者のかたも大なり小なり私達をご存知だという想定で作成しています。そのつもりでご覧下さい。

各項の更新は不定期ですが、なるべく毎週末迄に何らかの更新をするつもりです。

更新日を確認の上各項目を選択してください。

2003年 8月08日 R & N

目次	更新日
身辺雑記	2003年 8月08日
食べある記	2003年 8月08日
買い物百般	2003年 8月08日
エクスカーション	2003年 8月08日
ビーノ y セルベサ (暫定版)	2003年 8月08日
バック・ナンバー	2003年 8月08日

ご注意 : 各項目のファイルは更新日から一ヶ月を経過したら削除します。

悪しからず。

* 身近雑記 *

この項は、私達の日常生活の折々の出来事や、発見や、驚きや、疑問について、とりとめもなく勝手なゴタクを並べたものです。

「鳩の巣づくり？」ノ巻 2003年8月8日 更新

日本はこの週末、台風襲来のようなようですが、こちらは7月末以来記録的な暑さに見舞われています。多分欧州の熱波については、日本でも報道されているんでしょうが、毎日あっちもこっちも暑い暑いTV放送ばかりでウンザリしています。

私達のところは、日差しの下での暑さは話になりませんが、家の中で風の通り道を探してじっとしていれば、まずまず耐えがたいということはありません。何せクーラーなしでいられるのですから、たいしたことナイ、と言い切ることも出来ます。

乾湿計がないし、日本と違ってこのTVは湿度についてはノー・コメントですからはっきりした事は解りませんが、湿度がそう高くないことは確かで其れが救いです。家の中の温度計ではこれまでの最高が31度ぐらいで、そういう時バス通りにある電光掲示板では40度に達しています。それでも夜になれば普通はヒンヤリして来るんです。暑くて寝にくいという夜が2~3回ぐらいはあったでしょうか。

まあ、そんなところですよ。

食卓の窓辺に街路樹のハカランダ（ジャカランダ）が枝を伸ばしている事は前にお話ししたと思いますが、この木に十日ほど前から鳩が巣づくりをはじめました。窓から3メートル弱しかありません。朝早くからクークーとうるさいので、つついて追い払おうかと思っていました。実行に移す前にいつのまにか二羽になり、仲良く寄り添っているんです。いくらなんでも突っつくのは無粋に過ぎますね、まあ、シアーナイ、そのままになりました。

ところが折角建築許可を出したのに、このカップルあまり勤勉ではありません。初めのうちは二羽がそれぞれ枯草の軸みたいなのを運んできて一応巣らしきものの形は出

来たんですが、それ以後は未完成(みたいに見える)のままもう材料を運んでくる様子はありません。それに滞在時間が余りに短いんです。朝早い時間には二羽揃っているんですが、私達が朝食を食べている(9時過ぎ)頃どっかへ飛んでいってしまいます。

昼間は時々忘れた頃やってきて暫くは巢に座り込んでいますが、じきに又何処かへ行ってしまいます。二羽揃う事は朝以外にはあまりありません。そして夕方(20時か

21時)以後は寄り付かないんです。ここは単なる別宅なのか？

野鳥の種類にもその生態にも何の知識もないので、いったいこの二羽がなにをしようとしているのかサッパリです。一羽でいると相変わらずクークー言ってます。

広辞苑によると鳩は世界中に300種位がいるらしいんですが、この鳩が何という種類かさえ解りません。公園や広場などに群れているチョットずうずうしい鳩とは明らかに違います、清潔そうな感じですが。小柄でスリム、全体に薄茶色の印象です。一番の特徴は首の両側に黒い三日月型の線が水平に入っています。態度も公園や広場の鳩のようなふてぶてしさはなく、小さい目でオドオドとした感じを受けます。鳩なのかどうかも確かではありませんが、形は鳩としか思えません。鳴き声はホ・ホー・ホと

聞えます。これからいったいどうするつもりなのか、気が揉めます。

これじゃヒゲオヤジより滞在時間が少ないじゃないか、何してんだ、ツたく、です。

ヒゲは相変わらず足しげく通ってきます。八百屋のバカンス前よりは心なしか口数が増えたようにも見えますが、こっちも依然謎は続いています。



これがヒロイン。この鳥、何というのかどなたかご存知ないですか？

これを撮るのは苦勞でした。動物写真家の根気ヨサに改めて脱帽です。

食べある記

この項では、スペイン独特のメニュー、私達がこのあたりの飲食店で外食したときのエピソード、などをご紹介します。

「アロス・ネグロ」の巻 2003年8月8日 更新

arroz negro 黒い米、文字通り真っ黒なオジヤです。日本でもイカ墨パスタというのはそんなに珍しくなく、アチコチのイタメシ屋にありますね。あれのオジヤ版です。食べた所は、またまたマラガの大聖堂前。でもコレは例のジプシーネーの店ではなく大聖堂の正面入り口からは斜め前という位置関係、店本体も半地下ということもあって大聖堂を見上げながら呑み且つ喰うというわけには行きません。そのせいかその付近では珍しく客筋は地元スペイン人が半数以上という感じです。もっとも、テラス席もあるので、其処は逆に観光客がほとんどを占めているようです。

前にも言いましたがパエ(ウ)ヤとアロス何々というものの差は、具を一緒に炊き込むか否かだと思ふんです。しかと料理の本などで調べたわけではありませんから、違っていたらゴメンナサイ。このアロス・ネグロもそうですが、アロスとついているものには具がほとんど入っていません。入っていても小さく切ったものが見え隠れする程度でパエ(ウ)ヤのように、殻ごとのエビやムール貝などを乗つけるという派手な飾りもありません。デコレーション・ケーキとチーズ・ケーキの違いとでもいいでしょうか。パエ(ウ)ヤが不味いと言っているんではありません、でも殻つきのエビをオジヤ状の飯からとり出して殻をむいて、と考えると、Rのように、エビはどうでもいい、という人はそれだけでもうウンザリしてしまうんです。その点パエ(ウ)ヤ・ヴァレンシアーナは、シンプルな具こそ入ってはいますがややこしいデコレーションはなく、純粋に味で勝負という感じが好ましい。フォーク一本で手も汚さず食べられます。

さらにアロスなにがしになると、具さえ入っていないか、せいぜい見え隠れです。味に自信があるのはドッチか、もうほとんどキマリでしょう。オジヤじゃどっちみち見端じゃ勝負になりません。

私たち自身がそうですが、ノンベと言われる人たちの多くは何故か麺類が好きなんじゃないかと思っています。または、鍋物のアトの雑炊とか。理由は知りませんが皆さん、

呑んだアトはうどんとかオジヤとか柔らかめがいいようですね。

ここでは米はあくまで野菜ですから米料理が日本料理のごはんやうどんの役割をするわけではありません。ヴィノをやりつつアロスをつつけばいいのです。

そこで、アロス・ネグロです。定義は魚介のスープで煮たオジヤにイカ墨を入れたもの、でしょう。多分オリーブ油でたまねぎを炒め、生米を炒め、それにスープをいれて煮込み、イカ墨を加え、というような事だと思えます。勿論、分かれ目・決め手はスープの良し悪しですね。イカ墨の良し悪し、生臭くないかどうかポイントです。

さて、くだんの半地下のバルはどうだったか？ この店かなり古くからあるようで、落ち着いたいい雰囲気です。カマレロもみな気さくなニーちゃんです。リラックスできます。テーブルを囲んだのは、N、R、娘、それに娘の同僚のイギリス人。イカなんて食べれるのかな？ しかも真っ黒けのぐちゃぐちゃしたのが出てきたらどうだろう？

大丈夫？トライしてみる？ 本人はOK、ノー・プロブレム、と言っています。

ホントカネ、まっ、いいか、いってみよう。ウーン、バツでしたねー。多分イカ墨のせいだと思うんですが、味は悪くないのにチョット生臭いんです。クサイというほどではないにしても、ややにおいます。イギリス人も一生懸命食べているフリですが多分美味しいとは思っていないはず。救いは目の前にありました。アロスの前にケソ・

ハモン・チョリソーなどの盛り合わせ、日本ならさしずめお刺身・おつまみ盛り合わせみたいなものですが、それで赤をやっていました。これにケソ・アスール（ブルー・チーズ）がのってたんです。ためしにコレをヒトかけイカ墨オジヤに溶かしてみました。するとコレが大化け。コレなら魚嫌いのイギリス人もOK、ノー・プロブレムでしょう。それどころかベリー・ナイス、ムーチョ・ブエノです。イカ墨のクセとケ

ソ・アスールのクセがせめぎあった挙句うまく調和してくれたんですね。

クセをもってクセを制す。でも、私達の舌がどうしようもなく日本人なのか、地中海のイカのせいか、私達の記憶ではコレ迄に食べたイカ墨料理の決定版は、茅ヶ崎駅ビ

ル、グリルつばめの「ヤリイカの墨煮」でした。アレはうまかったなー。

* 買い物百般 *

この項は、日常の買い物で、異国だナーと感じた事や、なぜ？ どうして？ と思ったことなどの紹介です。

再び「規格違い」ノ巻 2003年8月8日 更新

先週お話したようにPCの使い始めは、案ずるよう産むが易し、という具合にいつてヤレヤレでしたが、電気にまつわることはこればかりではありません。

私達がここで生活をはじめて、PCの次に何とかしたいと思ったことは、映画です。

私達は二人とも映画大好き人間で、日本では毎週平均3～4本は見ていたのではないかと思います。 Rが乗船中はWOWOWで録画したテープを大量に船に持ってつ

てました。若いときは航海中の楽しみといえば読書とマージャンぐらいでしたが、日本人乗組員が少なくなるとともにメンバーが揃わなくなり、最終的には二人だけか、

または自分だけになってしまい最早マージャンどころではありません。 逆にその頃からビデオ・テープの利用が安く簡単にできるようになり、これは一人でも楽しめる

ので読書と並び航海中の欠かせぬ楽しみになっていたのです。

こちらへ来る事が決まった時点で、映画の事は真っ先に頭に浮かんだ事ですが、そこ

でまず、引っかかったのは、日本のテレビ放送の規格です。

日本のTV放送はNTSC方式、スペインを含む欧州全域はPAL方式です。日本で録画したテープはスペインのビデオ・デッキとテレビでは再生出来ない筈です。

両方に使用可能なマルチ対応という機器はありますが、高価でこれは問題外。

それにVHSテープはかさばるし、いずれはDVDにしたい。ではDVDは？

これが又一筋縄ではいかないのです。放送方式の違いに加えてリージョン・コードというものがあるのです。このコードは1から8までに分かれていて、それぞれに放送方式の違いが絡まります。結局出発までには、どうするか、の結論に達しないままに

なっていました。DVDレコーダーがまだ高いということと、現地の電気製品の市場がどんな様子かイマイチはつきりしないということもありました。私達自身も長期滞在許可がどうなるかもはつきりせず、まあとにかく一年は様子見にしようということになったのです。

さて、一年の在留許可（タルヘタ）も出たし、スペインの電気製品も話に聞いていたよりマトモだった、そろそろ本腰を入れて用意をしようかと思いました。この一年の間に日本のDVDレコーダーもかなり安くなって、追い風です。

ところが、調べれば調べるほどまた分からなくなるんです。まず、リージョン・コード、これは日本も欧州もリージョン・2、共通でOKでした。しかしテレビ放送方式の違いは依然として壁です。これをどう乗り越えるか？ 電気に詳しい友人に聞いた
り、自分でも各メーカーなどのHPを見て調べました。

日本で外国のDVDを見る方法については色々解説がしてあります。しかしその逆はついに見つかりませんでした。まあ、それは仕方がない事だとは思いますが。日本語のHPなんですから、日本にいる日本人が国内で見ることを前提にしているわけで、使用機器も全て日本製を前提にしています。これらの情報では、例えば欧州で収録したDVD（即ちPAL信号）を日本のテレビ画面で見ると、一番簡単なのはPAL対応のプレーヤーとPAL対応のTVを買うこと。こういうこともアキバへいくと可能なんですね。次にPAL対応プレーヤーにPAL・NTSC変換機というのををつないで日本のテレビ放送の信号に変えて普通の日本のTVで見る、又はPAL・NTSC変換対応プレーヤーと日本のTVの組み合わせ、が考えられると言うんです。

ナント日本ではいろんなものが売られているんですね。

しかし、肝心の私達の疑問は解けていません。私達はこの逆をやりたいのです。いろんな人に聞き、インターネットでも散々調べましたがシカとしたことが分かりませんでした。こういうとき、日本なら大型電器店へ行って各種パンフレットを一抱え貰ってくれば大概解決の糸口が見つかるものでした。ここではその方法が取れません。

パンフレットなんかないんです。デッド・ロックです。

或る日、電気店の広告ビラが郵便受けに入っていました。店に行ってもパンフレットなんかないくせに、広告ビラには結構詳しい説明が書いてあります。話は飛びますが

広告というのは何語の広告でも大抵分かりやすい言葉で書いてありますね。広告というものの性格から言って、不特定多数に向けた最も分かりやすい言葉でなければならぬわけで、私達のような幼稚園未満の語学力でも何とか理解できるように書いてくれています。郵便受けには結構広告ビラが入るので、NもRも広告を見るのは大事な日課の一つです。特にスーパーのビラは見逃せません。常用指定のヴィノが三本で二本分なんて事も良くありますからね。

その電気店の広告ビラに安いDVDプレーヤーのことが書いてあって、値段は大きく94.99ユーロとあり、其の他の仕様はゴチャゴチャと虫眼鏡がいるような小さい字で印刷されています、その一行に **compatible sistemas PAL/NTSC** とありました。これぞ私達が求めていた解答でした。このプレーヤーはPAL信号でもNTSC信号でも再生できるよ、というのです。ナントなんとアキバでは特別な機器として売られているマルチ対応プレーヤーが安売りの目玉商品で出てるんです。

それから気を付けてみると、同じ仕様を書いたものが沢山あって、どうやらこれがここでは主流のように思えます。

これで、目処はつきました。日本でDVDレコーダーを買って日本で放映される映画を録画し、こちらで買ったDVDプレーヤーでそのまま再生すればいいのです。

結局これも、案ずるより産むが易しということになりました。

そこで、改めて考えると、いま全てのお膳立てをしても、来年一月以降の在留許可がどうなるかは不明ですし、もしすんなり更新が認められた場合はカディスへの引越しもマジメに検討したい、引っ越すなら少しでも身軽なままでいたい。

あれこれ考えると結局、チョトマテということになりました。デ、相変わらず映画ナシ、日本語テレビナシ、日本語新聞ナシのナイナイ尽くしですが、これでも特に不便でも不満でもありません。新聞はインターネットで読もうと思えばいつでも読めるし

世界の大事件はCNNをみていれば大ザッパな事は分かります。

日本から買って持ってきたたった一つの欧州仕様の電気製品は三合炊き炊飯器です。

これはやはり買ってきて良かったと思っていますが、ほとんど出番はありません。

旨い米がないんです。電気の規格より米の規格の方が解決は遠いようです。

エクスカーション

この項はアンダルシアの各地へ徒歩、電車、バスなどで行った DAY TRIP の紹介です。

「スペインの中のイギリス」の巻 2003年8月8日 更新

五月初めの或る日、ジブラルタルに行ってきました。Gibrartar スペイン語ではヒブラルタルと発音します。改めて世界地図を見るまでもなく地中海の出口というか入口というか、とにかく地中海が唯一外洋＝大西洋に開いている口がここジブラルタル海峡です。この海峡に丁度舌べらのような形でのびている小さな半島、それが大英帝国がスペイン国内に持つ直轄領で、頑として返そうとしないジブラルタルです。

香港は仕方なく返しましたが、こっちは頬かむりを続けているようで。一時はスペインの方も意固地になり、国境を封鎖してあらゆる補給を絶つという挙に出たようですが、そこは大海運国イギリス、少しも騒がず一切の補給は海路本国から行ったので、ほとんど効果はなかったようです。現在は表面上はごく普通の国境でどちらからも簡単に行き来しています。スペイン人も国境の向こうに仕事を持ったり、免税品を買いに行ったりしているようです。

スペインだってアフリカ大陸モロッコ領内に二つの飛び地 Ceuta セウタと Melilla メリー(ッ)ヤを持っていて返さないんですからドッチもドッチですね。

ジブラルタルは現在の英西両国の親密な関係を背景に平穏な日々が続いているようですが、私達が見たセウタの様子はかなりキナクさいものでした。一方がイスラムの国ということもあるでしょうがセウタの街には相当不穏な空気が漂っていました。

ジブラルタルへのバス・ツアーはコンプラ compra 買い物、と銘打った免税品ショッピング・ツアーです。前にしたセウタのツアーの話、覚えておいでですか？ あれと同じ趣向のツアーです。ジブラルタルもセウタ同様本国から遠く離れて頑張っている住民に免税措置で報いているんですね。デ、我々はそのオコボレ頂戴なのです。

もっとも私達はポンド紙幣を持っているわけではありませんから、ほとんど恩恵には浴しません。ユーロ紙幣でもそのまま通用はするんですがユーロでの価格設定は決して安くはない感じでした。でもまあ私達はどうせ買い物の予定は全くないので、高かろうが安かろうが知った事ではないんです。

こういう旅ですから乗客は圧倒的にイギリス人が多く、ドイツ人ほかの欧州人はごく少数、日本人はと言うより東洋人は勿論私達だけ、スペイン人はゼロと見ました。バスの車内放送も英語だけ。出発は朝7時半、行き帰りのバスが計5時間、現地で5時間の自由行動です。要するにイギリス人ジー様バー様がチョット手軽に本国の空気を吸って、ついでにお土産の免税品を買おうというツアーです。イギリスへの旅ですから日帰りでも地続きでも「海外旅行」です。セウタの場合、海峡を渡ってアフリカ大陸へ行ったのに国内旅行だった事を考えると変な気がします。

私達はそれまでタルヘタがなかったので国外への旅行を控えていたのです。ヴィザの期限はとうに切れているので、一旦国外に出てしまうと再入国の際ややこしいことになりかねません。タルヘタの申請中ということを書類を並べて説明すればいいのでしようがそれも面倒な話です。タルヘタを得たからにはもう心配ナシというわけ。ところが、幅百メートルほどのニュートラル・ゾーンを挟んだそれぞれの国境検問所では両国とも実にアッケラカンで、バスに乗り込んできた移民官が各自が手に持つパスポートをチラット一瞥するだけ、50人ぐらいの乗客の出入国手続きは1分以内でオシマイです。これじゃヴィザの期限など見える筈もありません。

国境を越えて一步ジブラルタルに入ると、もう其処はイギリスです。

ロンドン名物赤いダブルデッカー（二階バス）が走っています。街のたたずまいもスペインの街の三点セット、白壁・タイル・大理石はなく、石壁に黒ずんだいしだたみとどことなく重い感じがします。私達は買い物目的ではないので街は素通り、お目当てのロープウェイへ直行です。ここの岩山の事をザ・ロック THE ROCK と呼んでいます。有名なサンフランシスコの監獄島アルカトラスも同じように呼ばれていて映画の題名にもなりましたが、ここの方がけた違いに規模の大きいロックです。

この大きい岩山の西の斜面にロープウェイがあり、前から海峡を通るたびにいつかアレに乗りたいと思っていたのです。ところが残念な事にこの日は西風が強く終日運休

になっていました。ケーブルの駅には観光タクシーの一群がたむろしてしきりに客引きをしていましたが、私達は登るのは絶対ケーブルでと決め込んでいたので、駄目なら又いつか出直そうと、予定を変更して半島の尖端ヨーロッパ・ポイント迄ぶらぶら歩くことにしました。

ロックの麓をグルッと巡る小一時間の散歩です。途中ジブラルタル・ベイを一望出来るひらけた小高い場所が何箇所もあり、湾の反対側のアルヘシラス、海峡の対岸アフリカ大陸、海峡を東西に通過する大型船、湾内に錨泊している船、ジブラルタルの港内の様子など手に取るように見えました。この日は強風でケーブルには乗れなかったけれど、代わりに視界は極めて良好で、これには大満足でした。

岬の先端ヨーロッパ・ポイントの白赤白の灯台は、沖からは何度も見っていますが、現場にきたのは初めてです。ここに限らず灯台は沖から見るのが当たり前だったわけで其れが灯台の本来のあり方ですね。こうして陸側から灯台を見るのはR自身がオカのヒトになったということでは些か居心地の悪い感じもしないではありません。

そういう心情を英語では **Once a sailor, always a sailor.** というのだそうですが、全く言い得て妙、イギリス人は船乗りの心理を良く解っているなと思います。さすが海洋民族というべきか。それに当たる日本語として思い当たるのは、「三つ子のたましい・・・」はまだいいとして、「・・・は三日やったら・・・」なんてのになるとなんととも情けない。

灯台の脇には **Last shop in Europe** という名の土産物屋がありました。傍らの碑には昔はここがヨーロッパのハズレでここから先は何もないと信じられていたのだ、というような言葉を刻んでありました。ちなみにイベリア半島の南端は海峡の西の端、タリファという所です。当然其処にも同じような碑も土産物屋もあるんでしょうね。

帰りはさすがにチョット疲れたので岬の先端から市内行きのバスに乗りました。この路線バスは十二~三人乗ったら満席のミニバスでしたが、誰かがドアを引っ張っていないとカーブする時開いてしまうのです。運転手は陽気なスペイン系で、例によって途中で乗ってきた顔見知りのオバサンと後ろを向いて大ツパナシです。イヤハヤ。ツアー・バスの出発時間まで商店街をぶらつきました。値札はポンドとユーロの二本

立てです。ポンドで払えばお釣もポンド、ユーロで払えばユーロなんですが、ユーロの値付けがとても高いのです。1ポンド1.75ユーロに相当する設定で、その日の為替レートでは1.42でしたからポンドを持っているイギリス人にはかなり有利な

買い物が出来、私達のようにユーロを使うものには極めて不利なんです。

ロックを見上げるテラスで「イギリスでの外食はコレ」とほとんど決め込んでいるサンドウィッチとギネスで昼食です。二人で14ユーロも取られました。スペインならパエ(っ)ヤにヴィノー一本空けたのに。次に来る時はオベント持ってこよう。

帰りのバスの中は幸せそうなイギリス人のジー様バー様で一杯でした。免税限度一杯まで買い込んだスコッチやゴードン・ジンの瓶でしょう、アチコチでカラコロ賑やかな音を立て、みんな満足そうにニコニコしていました。



暗雲たれこむザ・ロック、これはセウタへ行ったとき撮ったもの、この日は時化模様。



「ヨーロッパの果ての」という土産物屋。三角の碑に「ここが地の果て」とある。

* ビーノ y セルベサ * 暫定版

ビーノ、セルベサに限らずアルコール飲料全般にまつわるオハナシです。

「アグハ」の巻 2003年8月8日 更新

aguja です。これについては前にチラッとお話ししましたが、今日はじっくりいきます。アグハとは針の意味だということも、ちくちく舌を刺す感じがピッタリだということもお話しましたね。詳しい事は知りませんが多分名前の由来はそんな所だと勝手に思っています。まあ炭酸飲料の舌ざわりをグット軽くした感じですよ。

私達は日本にいたときそんなに多くのスペイン・ワインを呑んでいたわけではありませんからよく分かりませんが、日本では発泡ワイン・カヴァ cava ほどは知られていないだろうと思います。私達は日本では見たことありませんでした。

7月下旬から暑さも本格的になり食欲もやや減退気味です。こうなれば土用のウナギでも食べて体力増強と行きたい所ですが、それより、もうアッサリ、サッパリが良くなってきました。今からこんな事ではイカンでしょうか？

ウナギはあることはあるんです。でも、私達はまだ試してませんが、スペインのウナギ料理はぶつ切りの煮込みが主流のようです。この陽気では煮込みはチョットねー。ここの夏は、焼き鳥と並んで蒲焼の屋台をやったら売れに売れるんじゃないかと思えます。渋団扇でパタパタやれば押すな押すなになるんじゃないか、鮭屋よりは確実に人を呼べると思うんです。材料の調達も簡単だし・・・。

ところで、こう暑くなると自然赤より良く冷えた白となります。そこで今まで立ち止まる時間が少なかった白の棚の前に長くいることになり、じっくり見てみると、今まで普通の白だと思っていたものでも小さくアグハとプリントされたものが何本か見つかりました。こんな小さい字じゃ間違っアグアと読んでしまってもしょうがないく

らい小さい字です。カヴァは大概大きい字でプリントされてるのに、なぜでしょう。

発泡の程度が小さいから遠慮してるのでしょうか、まさかね。

発泡の程度は確かにカヴァよりずっと弱いんです。カヴァの栓はシャンパンと同じように針金で留めてありますが、アグハの栓は普通のヴィノと同じ栓を使っているものと、シャンパン式の栓が半々ぐらいでしょうか。発泡が弱いから普通の栓でももつんですね。瓶もカヴァほど頑丈ではありません。全てがカヴァの舎弟という感じです。しかし、カヴァはスペインの北東端カタルーニャ産ですがアグハは産地の限定はないようです。北海岸に多いとも聞いています。その意味では他人です。

瓶には大抵自然の醗酵による発泡だ、ということを謳ってあります。要するに醗酵の時出る炭酸ガスを全部逃がさず一部残す、言いかえれば醗酵が完了しないうちに瓶詰めしてしまうんでしょうか、自信はありませんがそんな事だろうと思います。

これまでに5種のアグハを試してみましたが、前にお話した通り、やはり食事にはカヴァよりはマシです。辛口のものなら魚をはじめアッサリ味の料理には何とかいけると言っていていいでしょう。ですが発泡酒は発泡酒で、どうしても甘味が少し残ります。それは醗酵を完了させないから、即ちぶどう果汁の糖分が一部醗酵しないまま残っているからだと思うんです。又はビールと同じように一旦醗酵は完了させて、瓶詰め時ごく少量の砂糖を加えるのか？そうすると瓶の中で再び醗酵が始まり炭酸ガスが発生して栓を抜くと発泡する、という仕掛けか？ 自ビールではそうするんです。

この最後の瓶内での醗酵による炭酸ガスがビールに泡をもたらし、喉越しをよくしてくれるんです。発泡ワインの場合はどうなのでしょう。砂糖を使っているとは表示してありません。どなたか醸造とか醗酵に詳しい方教えてくださいませんか？

カヴァも食事のおともでなければ決して悪いものではありません。アグハも同様にキリキリに冷やしたこれは清涼飲料としては言う事ナシです。しかも嬉しい事に平均価格はカヴァのその約半分と言っていていいでしょう。これだけでもうナンデモ許そうという気になってしまいます。



左はシャンパンと同じ栓。右は普通のコルク栓。ドッチが高いと思いますか？



Aguja と自然発酵の表示。

右下の AGUAS が読めますか？

これで又「メ」をむきましたが、
これは **Siete Aguas** という地名
でした。ヤヤこしい。

ところで今週号から少し構成を変えました。

ヴィノとセルベサを一本にまとめることにしました。さてはネタ切れか？と、お考え
でしょうが、さにあらず、どうも毎週の更新分を画像とともにA4判二ページに収め
るとなると言い足りないし、そうかといって三ページでは活字が多すぎて、読んで下
さる方に苦痛ではないか？ 書くほうは大ヒマジンですが忙しい中でチョコチョコ
と読んでいただくには？ とか色々考えた末、二本を一本にまとめて三ページ、とい
うのがオサマリがいいように思えたのです。ヨロシク。

バック・ナンバー

この項は、昨年11月の入国から一部の友人にしていた折々の近況報告の数々を編集したものです。いっぺんにすべてのバックナンバーを掲載するのは時間的に間に合わないので、順次時間ができ次第追加してゆきます。更新日と番号にご注意ください。

「タルヘタ出た」ノ巻(2003年5月2日)

2003年8月8日 更新

tarjeta あらゆる種類のカードをいいます。テレフォン・カードはタルヘタ・テレフォニカ **tarjeta telefónica**、サッカーのレッド・カードはタルヘタ・ロホ **tarjeta roja**。この場合は居住許可証=ペルミソ・デ・レシデンシア **permiso de residencia** です。まずこれで来年一月までの居住を許可されたのです。最初の期限是一年です。以後更新を繰り返すと三年、五年と段々長くなるのだと聞いていますが、確かな事は何も分かりません。この国では先の事はあまりよく分からないのです。私達の語学力のナサゆえの理解不足は当然あるでしょうが、それだけとは言い切れない不透明さを感じます。お役人は日本以上に官僚的なのではないかと思えます。

または、単に能率が悪いだけか。

このタルヘタも本当なら三月初めにもらえるはずだったのに、のびのびになっていて四月半ばに催促に行ったら、末には出せるだろうと悠長な話です。タルヘタの引換券の裏にはこの書類の有効期間は45日と明記してあってそれも切れているのです。

それを言うと、受付嬢は、いいのイイノ気にしないで、という調子です。ツタク。アスタ・マニャーナの本領発揮ですね。でもこちらのミスで何かの期限をはずしたらいいのイイノと言ってくれるかどうか、まず、駄目でしょうね。洋の東西を問わず。

タルヘタは国家警察(内務省管轄) **policia nacional** の裁量事項ですが、これがご多分に漏れず非常に官僚的な機構で、タルヘタは出したものの、それに関する説明も案内書も一切ありません。カードを一枚ぽろっとくれるだけ。

例えば住所変更の手続きは、更新手続きは、など外国人は知るわけがなく、どうせ又

その都度窓口へ聞きに行かねばなりません。だから個々の質問に答えるより、手続き関連事項を印刷した紙一枚をタルヘタと一緒に渡せばお互いに面倒は省けると思うのです。または申請窓口の近くにそういう説明を掲示するなり、記入例を展示するなりすれば事務は飛躍的に捗る筈です。なにしろ窓口では申請手続きの処理より質問に答えている時間の方がずっと長そうです。しかし、決して事務をスピーディーに処理しようなどと考えないところがこの国の「ヨサ」なのかも知れません。

もう一つ分からないのは、タルヘタの有効期限が来年1月16日となっていることです。最初の居住許可は一年間と理解していたのですが、期限の起算日が一年前の今年1月のどういう日だったのか皆目分かりません。最初に貰ったヴィザの期限は1月25日ですから少し違います。有効期間は一年ではなく「約」一年なんでしょうね。

最近になって分かったことですが、散々探し回って見つけれなかったバス路線図がマラガ市にはあったのです。マラガは70万都市だそうですから、当たり前と言えば当たり前です。マラガのバス・センターに一枚掲示してありました。ところがこのコピーを欲しいといってもどこにもないのです。勿論この路線図、手書きではありませんから何枚印刷しても手間はあまり変わらないと思うんですが、配布用又は販売用はナイと言うんです。全く不可解です。

また、わが町ベナルマデナと東隣りのトレモリノスという町は一つのバス会社が独占運行ですが、路線図そのものが存在せず、乗りなれたルートでも或る日突然部分的に変更になっていた、なんていうことは日常茶飯事です。だからバス停では、我々外国人に限らず、スペイン人それも明らかに地元住民らしい人たちが、バスが止まると運転手に長々と自分の行く先に付いて質問をしています。また、運転手の方も慌てず騒がず、他の乗客を待たせていることなどお構いなしに、同じような質問に一人ずつ懇切に答えているようです。

タルヘタの件もそうですが、分からなければ聞けばいいじゃないか、聞けばいくらでも教えてあげるよ、それが普通の考え方らしいんですね。だから食品スーパーなどは別として、普通の対面販売の店では、客の質問に対してエンエンと何かを説明しているのをよく見かけます。次に待っている客の存在など決して気にしません。そして、

散々説明を聞いた客が結局買うのをやめて、その間に待ちくたびれたか又はRのように
に気の短い客があきれて帰ってしまったとしても気にしていないように見えます。
一人の客のために長蛇の列になっても平気のようです。これがスペイン全土の事か、
この辺独特の人情なのか知る由もありませんが、忙しい日本人にはチョット理解しに
くい事ではあります。

この辺では日本のような大規模電器店は見かけませんが、中規模店などでもカタログ
やパンフレットのたぐいは置いてません。日本のような購買意欲をそそる詳しいパン
フレット等はそれ自体存在しないのではないかと思います。だから皆聞くんです。
ただヒタスラ聞くんです。答えるほうもそれが仕事と割り切っているのか、又は豊富
な商品知識があるのか(とてもそのようには見えませんが)エンエンと教えています。
Rのように人にもものを聞くのが嫌いな人間にはこれが結構苦痛です。何か物を買う時
特にチョット大きなものを買う時、まずカタログを深読みします。これ自体結構楽し
くて、日本ではカタログ深読みマニアというような人が結構いると思います。

カタログは辞書と共に未知の事を只で教えてくれる良き友と思っています。
Rは地図も大好きですが、この国の地図の不正確さには閉口します。大胆に言ってし
まうと、この辺のスペイン人は目から入る情報よりも耳から入るほうをヨシとしてい
るような気がします。本屋の数も極端に少ないのです。だから好きな立ち読みもママ
なりません。ある時期には世界を席捲した先進文化国家であったはずなのに、意外で
す。それはリゾート地という、ここだけの特殊事情なのかもしれませんが・・・。

先日、山へ遠足に行った帰りバスに乗りました。途中停留所でもなんでもないガス・
スタンドで止まり、エンジンかけっぱなしで運転手は何処かへ消えました。乗客は私
達以外はイギリス人らしき老夫婦が三組と地元民らしいオバさん一人でしたが、オバ
さん以外は???でした。オバさんは平然。暫くすると運転手は悠々と帰ってきて何
事もなくまた動き出しました。どうやら「自然」に呼ばれたようなんです。日本の
近距離路線バスで運転手自身のトイレ休憩なんて考えられませんよね。しかしこれも
人間的といえれば人間的で、終点まで我慢、なんて誰も考えないんです。
